

○柳田 萌香 氏（平成 21 年（当時 13 歳）、父を交通事故で失う）

[要旨]

事故の概要、事故後の生活環境

現在、交通遺児育英会が運営している学生寮「心塾」^{こころじゅく}にお世話になりながら、東京の大学に通っています。大学 4 年生、22 歳です。

事故当時、父は福島に単身赴任をしており、仙台の自宅には中学 1 年生だった私と母の二人で暮らしていました。7 つ上の兄は東京の大学に通っていたため、東京で一人暮らしをしていました。父は、週末の土日に仙台の自宅に帰ってきて過ごし、平日は福島に戻って仕事をするという生活をしていました。

事故が起きたのは平成 21 年 9 月 27 日でした。日曜日でしたが、たまたま父は仙台には帰っておらず、27 日夜 10 時 50 分頃、福島で事故が起きました。警察から夜中 12 時くらいに自宅に電話がかかってきて、電話に出た母に、「お父さんが福島で自爆したって。福島に早く行かなきゃいけないから起きて」と起こされ、夜中のうちに福島に向かいました。

事故の詳細は分からないのですが、助手席からの出火で父は背中と腕と顔に重度の火傷を負っており、助かる見込みがないだろうということで、事故現場近くの病院に運ばれていました。兄が、どうしても助けてほしいと要請し、福島医大にドクターヘリで父を運ぶことが決まりました。本当は仙台に父を運びたかったのですが、それだと父の体力がもたない、亡くなってしまうということで、福島医大に転院して ICU(集中治療室)に入りました。

母は父の付き添いでずっと福島に残らなくてはならず、私は仙台に戻り、母方のおば家族と祖父母にお世話になりながら学校に通うという生活が始まりました。学校に行っても私は授業に集中できず、いつ父が亡くなるかも分からない状態で、母とも離れていて、兄は東京にいるので、今思い返すと孤独だったのかなと思います。

この生活環境の中で、悲しかったことがあります。おば家族から、「お菓子を食いたいな」と言うだけで「お菓子食べ過ぎだからやめて」と文句を言われたり、不慣れなスクールバスに乗り遅れたため迎えに来てもらった時は「なんで乗り過ごすの」と文句を言われたり、とても落ち着かない状況で生活を送っていました。おばから、もう世話はできないと言われ、次の週から祖母の家で生活するようになるのですが、祖母からも、「あなたの弁当を作るために、朝早く起きなきゃいけない」と文句を言われるなど、「ああ、ここでも言われるのか」と悲しい気持ちになりました。これなら私一人で家から通ったほうが良いと思い、母にも相談し、自宅から一人で通ったことも数日ありました。

父は重度の火傷を負い 3 度の皮膚移植手術をしました。手術の日は、高速バスと路線バスを乗り継いで福島医大まで一人で行って帰ってくるということを何度かしましたが、おじやおばも時間がある時は、福島の病院まで車で送り迎えをしてくれました。おじが送り迎えをしてくれた時、「お前のお

父さんは自殺したに決まっている」「お前を私立に通わせて、習い事もさせて、あんな家に住んで、お兄ちゃんも私立に通わせて、経済的につらくなって自殺したに決まっている。お前のせいだ」ということを言われたことがあります。その当時は何を言ってるのか訳が分からなかったのですが、今思い返すと、13歳の子どもに言うことなのかなと思います。13歳ながらに、親戚は当てにならないと感じました。親戚だから力になってくれる訳ではない、悲しい現実を見たような気がします。

助けとなった学校での生活

学校では、父が事故でいつ死ぬか分からないような状況の私に、友達もなんと声をかけていいか分からなかったと思います。友達から「大丈夫？」と声をかけてもらっても、私は「大丈夫」とも言えずボロボロ泣くしかありませんでした。でも、私の周りにはそのように支えてくれた友達がいたので、すごく助かったと思っています。

副担任の先生は、私を気遣い、「授業に集中できなければ、職員室に来て構わない」と言ってくださるなど優しく接してくださいました。職員室で過ごすことも多々ありました。そこには、「逃げてるんでしょ」と言う人は誰もいなかったのも、本当に有り難い環境でした。学校に相談できる大人がいることが、子どもにとっては必要なことだと思います。

教頭先生も良くしてくださいました。私が、おばからも祖母からもあまり快い扱いをされないことを相談したところ、私が通っていた学校は中高一貫校だったのですが、高校生になったら入れる学校の学生寮に、特別に入れるよう力になってくださいました。寮に入る手続きを始めようとした時、11月7日に父が亡くなりました。

事故の原因究明と、寄り添う支援を

父がどのようにして事故に遭ったのか全く分からなかったのも、父本人から事故の話は聞くしかありませんでした。警察は、父の意識が戻ったら事故の詳細を伺いますと言う一方で、警察に置いてあった事故車両を早く処理してほしいとも言われました。父は意識を戻すとショック死してしまうと医師から聞かされていたので、意識を戻せなかったのですが、警察からは「まだ意識は戻っていないんですか」と頻りに聞かれ、心を痛めたこともありました。

結局、意識が戻らずに亡くなったため、事故の詳細は分かっていません。対向車線に人がいたのか、人を避けようとして自爆したのか、ガードレールにぶつかったのか、出火の原因は何なのか、何もわからずにこの9年間が経ちました。どのように父が苦しんだのか、考えてしまう時があります。はっきりしていないと、自分の中で決めつけてしまうことも多くなります。交通事故で不可解なことがあっても、きちんと原因究明をしてほしいと思います。

遺族の側から警察署に何かアクションを起こしたり、事故の解決方法を探すという行動を取れば、

もしかしたら事故の詳細についてもっと調べられたのかもしれませんが、その時は、母はもちろん余裕はありませんでしたし、私も兄もそのような行動を取ることはできませんでした。そのような時、被害者の家族に寄り添って、事故の原因究明や車両の調査などを手助けしてくれる機関があればよいと思います。

それと、親を亡くした子どもには、学校など身近なところに支えてくれる大人がいて、さまざまな面で関わってもらえたらよいと思います。